

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2009  
課題番号：19530540  
研究課題名（和文） ひとり親家族における子どもの発達を保障する「自立支援」に関する実証研究  
研究課題名（英文） An empirical study about "the independence support" to guarantee the development of the children in the one parent family  
研究代表者 神原 文子（KAMBARA FUMIKO）  
神戸学院大学人文学部教授  
研究者番号： 50186178

## 研究成果の概要（和文）：

第1に、ひとり親家族に育つ50人ほどの子どもを対象にしてインタビュー調査を行い、ひとり親家族の生活状況を捉えた。そのなかで、ほとんどの子どもたちがひとり親家族で育っていることを受容していることを明らかにした。

第2に、ひとり親家族で育っている高校生と、ふたり親家族で育っている高校生を対象に「高校生の生活と意識調査」を実施した。その結果、ひとり親家族で育つ生徒とふたり親家族で育つ生徒の比較によると、親子関係の良好さには違いはないが、ひとり親家族に育つ高校生のほうが、小遣いが少ないこと、アルバイトをよくしていること、学習時間が少ないこと、大学進学希望が低いことなどが明らかになった。

## 研究成果の概要（英文）：

First, 50 children raised in single-parent family were interviewed in order to clarify their living conditions. The result showed that most of the children accept the circumstances of each family as one-parent.

Second, the investigation named "the lifestyles of high school students and their consciousness" was carried out through questionnaire method. Two groups; "high school students raised by one parent" and "high school students raised by two parents" were established and compared each other. As a result, no significant difference regarding the quality of parenthood was found between the two groups. However, the result revealed that high school students raised by one parent receive less allowance, spend more time on part-time job but less on school work and less hope to go to college compared to high school students raised by two parents.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 20 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成 21 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総 計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ひとり親家族 (2) 子どもの発達 (3) 自立支援  
 (4) インタビュー調査 (5) 子どもの生活支援 (6) 高校生調査

1. 研究開始当初の背景

わが国が直面する少子高齢化を背景として、「子育てを支援する社会構造」の構築が提唱されるようになってきている。行政側からも「母親だけが子育てをする」から「母親も父親も子育てをする」さらには「地域社会で子育てを支援する」という子育て観への転換がなされている。これを受けて多様な「子育て支援策」が展開されつつあるが、その内容は「ふたり親家族」を主眼に置いた支援策に偏っているといわざるをえない。なぜなら、近年増加しているひとり親家族にたいする子育て支援策は、むしろ削減の方向にあるからである。1990年代からの長引く不況と、2003年度から大きく転換したひとり親家族への自立支援策のもと、多くのひとり親家族は、これまで以上に経済的に困窮化し、子どもの健全な発達にも影響しかねない現状にある。しかし、従来、ひとり親家族の子どもの発達や自立に関する学術的な調査研究はほとんどなされていない状況にあった。これまでの「ひとり親家族」研究では、第一に、母子家族の貧困の解明に焦点を、研究代表者である神原(2006)は、全国家族調査のデータをもとに、母子家族の貧困要因として、低学歴、

常時雇用の少なさ、就業移動の難しさ、低賃金などをあげ、貧困要因の解明を試みている。第二は、ジェンダー論的視点で、父子家族の生活困難に焦点を当てた研究がある。母子家族と比較して父子家族は生活困難を抱えた家族としては捉えられず、社会福祉の対象とは見なされてこなかった経緯がある。しかし父子世帯が母子世帯と共通する困難を抱えていると同時に、固有の困難をも抱えた世帯であることが明らかにされている。第三は、ひとり親家族で育つ子どもに焦点をあて、ひとり親家族であることについての子どもの思いや子どもが直面している生活諸問題の解明をはかる研究である。さらに、ひとり親で育つ子どもの生活問題、特に子育てと教育における「世代的再生産」に焦点を当てて、研究代表者の神原は、大阪市の委託を受けて『ひとり親家庭等実態調査報告書』(大阪市, 2004)をまとめているが、16歳、17歳の子どもたちにおいて、中卒者が10%であり、その子どもたちの6割が職にも就いていないという実態を明らかにしている。また、高校卒の子どもたちでも就職率が6割であり、20歳未満の子どもたちにおいて、大学進学率が2割台とわが国の大学進学率を大きく下回

っていることも明らかにしている。

これらの分析から、子どもの発達過程における「不利の世代的再生産の構造」が示唆され、社会的に忘れられ、「社会から排除」される子どもたちの厳しい生活実態がようやく浮かび上がってきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、このような課題をふまえ、「ひとり親家族で育つ子どもの発達保障」はいかに可能かという問題意識のもと、子どもの発達段階の違いをふまえながら、子どもの視点で、ひとり親家族を捉え直し、個々のひとり親家族に生活困難を生じさせている諸要因の相互関連を検討するなかで、ひとり親家族の親と子どもの「自立」課題を明らかにし、ひとり親家族の多様なケースに応じた有効な自立支援策を具体的に提案することをねらいとする。

## 3. 研究の方法

(1)ひとり親家族で育つ小学生から社会人まで広くインタビュー調査を実施する。インタビュー調査の内容は、現在の家族構成、・ひとり親家庭になったいきさつ、・一緒に生活している親のこと、・別れた親のこと、・ひとり親であることについての思い、・これからの進学や進路のこと、・困っていること、・いやなことなどである。

(2)ひとり親家族で育つ高校生 400 人とふたり親家族で育つ高校生 600 人対象に、生活と意識に関するアンケート調査を実施し、比較分析を行う。

## 4. 研究成果

### (1)アンケート調査分析結果

ひとり親家族で育つ高校生とふたり親家族で育つ高校生を対象に、それぞれの家族の相違による高校生の育ちにみられる特徴や

生活課題について比較検討した。

- ・調査実施時期：2009年2月～6月
- ・調査方法：複数の高校で、教室でアンケート調査票を配布してもらい、記入後、封筒に入れて回収した。ひとり親家族の高校生については、母子福祉団体の協力を得て、配布回収を依頼した。
- ・対象者の抽出：協力してもらえる複数の高校の特定のクラスで調査を実施したため、データの偏りは否めない。

以下では、ひとり親家族の親が母親の場合を「母親家族」、父親の場合を「父親家族」、父親と母親との家族を「父母家族」、そして、母親も父親もいない場合を、「その他家族」とする。母子家族では3年生に偏っており、父母家族では、1,2年に偏っている。

以下のような知見を得ることができた。

<知見1> 母親家族や父親家族の高校生の場合、父母家族の高校生と比べて、朝食を食べる割合や遅刻しないで起きる割合が低い傾向にある。

<知見2> 母親家族とその他家族の高校生は、父親家族と父母家族の高校生よりも、保護者から1ヶ月の小遣いをもらっている比率が低い。

<知見3> 母親家族とその他家族の高校生は、父親家族、父母家族の高校生よりもアルバイトをしている比率が高い。

<知見4> 保護者から1ヶ月に小遣いをもらっていない高校生は、もらっている高校生よりもアルバイトをする傾向が高い。

<知見5> アルバイトをしているほど、学校以外の学習時間が短い傾向にある。

<知見6> 高校卒業後の進路希望が、大学の場合に比べて、就職希望や専門学校希望の高校生の学校以外の学習時間が短い傾向にある。

<知見7> 高校卒業後の進路希望が就職や

専門学校の高校生では、大学進学希望の高校生よりもアルバイトをしている傾向が高い。

<知見 8> 父親家族の高校生は、母親家族や父母家族の高校生よりも自己肯定感や被受容感が低い傾向にある。

<知見 9> 母親家族や父親家族の高校生は、父母家族の高校生よりも経済安定感が低い傾向にある。

<知見 10> 父母家族の高校生は、母親家族や父親家族の高校生よりも有意味感が低い傾向にある。

<知見 11> 家族構成が異なっても、高校生の家族観には有意な差はみられない。

<知見 12> 母親の学歴が高いほど、子どもの大学進学希望は高い傾向にある。

<知見 13> 母親家族と父母家族と、母親の学歴が同程度であっても、子どもの大学進学希望は父母家族のほうが高い。

<知見 14> 家族構成が母親家族か父母家族かという違いは、高校生の卒業後の進路希望に強い影響力をもつ。

<知見 15> 家族構成にかかわりなく、「アルバイトの日数」「普段の学習時間」、保護者における学習支援が、卒業後の進路希望に影響する。

<知見 16> 家族構成にかかわりなく、高校生の性別が、卒業後の進路希望に影響する。また、その影響の度合いは、父母家族よりも母親家族において広がる傾向がみられる。

<知見 17> 母親の学歴は、高校生の卒業後の進路希望に影響するが、母親家族においては顕著な影響はみられない。

<知見 18> 母親家族の高校生において、有意味感が高いほど、大学進学希望の傾向が高い。

(2)インタビュー調査 - 本村による大学生調査から

この調査では、彼らがひとり親家族を生きる上で、何が最も有効な手段（資源）であったのかという視点からその回答の抽出を試みた。多くの場合、この返答には対象者たちが即答できるケースは少なく、しばしば「何だろうか」と考えこむ様子が見られた。

そこで、大学生に至るまでの学校期間における親子関係、友人関係、教師との関係、地域の人々との関係などを回想的に語って貰うことにした。それらの回想的な語りの中に、彼らが自身の境遇を決してネガティブには認識して来なかった幾つかの背景が透けて見えてきたと思われる。以下に主たる語りを紹介する。

【ひとり親家族を生きる上で何が有効な資源であったか：社会的包摂】

自分は、最初は経済的な糧が重要だと思っていた。けれど、最近は、やはり人間的な繋がりとというか、周りとの情緒的な関わりを失わずにいられたことが一番大きいかもしれない。

自分は親のうちの一人は足りなかったかもしれないけれど、今いる親やきょうだいとの繋がりに十分に満足して生きて来られた。それ以外にも、友達や学校の先生など、自分が認められて、愛して貰える存在があったから、だと思う。

もし、自分が将来教師になって母子家庭や父子家庭の子どもたちの支えになってやれるとしたら、その子らが「話したい！」って思っていそうな時に何でも聴いてやることだと思っている。

彼らは少なくとも20年ほどの人生のなかで往々にして何かしらの所属集団に「包摂されて生きて来た」と自覚している。時には、自身の家族認識と社会とのズレのなかで“笑い”を取りながら適応することに挑むことや、

葛藤を経験しながらも、自身の承認欲求を満たしながら生きていきたいという人間の本質的欲求を志向できる人生を、生きて来られた人間関係を含む環境こそが、彼らがひとり親家族を生きるうえで抱えがちな困難を支えた資源とみなされている、と言えるのではないだろうか。

### (3)インタビュー調査の結果 - 神原による子ども調査から

30人近い子どもたちへインタビューをおこない、本当に、子どもたちの「語りのちから」に圧倒された。インタビューでは、最初から、結構、単刀直入に、親御さんの離婚のいきさつや、両親が離婚したことについての思いなどについて質問したが、どの子どもたちも、すでに、自分のなかで答を出しているかのように、ストレートに、しかも、嫌な顔をすることもなく、答えてくれた。

30名近い子どもたちへのインタビューをつうじて、自分自身が、いかに、「子どもの貧困」について、先入観をいただいていたか、気づかされることになった。なかには、親御さんの収入が少なく、母子でぎりぎりの暮らしをしているだろうと想像できる場合でも、子どもたちの口から、「生活に困っている」という話は一言も出ず、貧しそうな様子も見受けられないのだった。なかには、両親が離婚してからのほうが、生活が良くなったという回答もあり、驚きであった。

それでも、子どもたちが、意識していない、あるいは、気づいていないような、「貧しさ」に、私のほうが気づくことが幾度かあった。中学生の男子の兄弟の着ていた制服は、しみがついていたり、汚れたままであった。また、中学生男子の履いていた靴下は、汚れて穴が開いたままであった。高校生の多くが、奨学金を受けており、進路選択の話では、自ずと、親にあまり負担をかけないようにといった自己規制を働かせている様子が見受けられ

た。大学生では、記述したように、奨学金を受けながら、しかも、放課後は毎日のようにバイトをしていた。バイトのために、部活を断念するという学生も珍しくなかった。

ただ、同時に、子どもたちは、結構、自然体で生活しており、しなやかさを具えていることに感心した。今回、インタビューに応じてくれた子どもたちは、ひとり親家族で育つ子どもたちのなかで、比較的、経済的、人間関係的には、恵まれた子どもたちだからかもしれない。それでも、ひとり親家族で育つ子どもたちと、真正面から向き合う時に、「子どもの貧困」の実態を捉えると同時に、ひとり親家族で育つゆえ、とも思える自立力に注目したいと思えた。と同時に、ひとり親家族の子どもたちが、自分で自分の人生を切り開く力を培ううえで、保護者の前向きな生き方、身近な援助者、子どもたちの親しい友だち関係、周囲の人びとの暖かいまなざしなどが極めて重要な意味を持っていることが察知された。それゆえ、これらの諸条件を整えることができれば、子どもたちは、「ひとり親家族」であるということ、なんら「不利」や「負目」にすることなく、育つことができるだろう、ということが見えてきたことは、なにより、私自身にとっての希望となった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

神原文子 2009「現代日本の子づれシングルと子どもたち」『立命館言語文化研究』査読無, 2 1-1, 7-27 頁

〔学会発表〕(計1件)

神原文子 2009「ひとり親家族の子どもの育ちと向き合う」日本教育社会学会大会

〔図書〕(計2件)

神原文子 2009「ひとり親家庭のくらしと子

育てを支援する社会運動」(財)大阪社会運動協会編『大阪社会労働運動史』第9巻 総  
733頁、475-489頁

神原文子 2010「日本の子づれシングルと子どもたち」中嶋和夫・尹靖水・近藤理恵編『多様な家族における新しい福祉モデルの国際比較研究 - 若者、ひとり親家族、高齢者』学文社 総411頁、48-66頁

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

神原 文子 (KAMBARA FUMIKO)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：5 0 1 8 6 1 7

### (2) 研究分担者

本村 めぐみ (MOTOMURA MEGUMI)

和歌山大学・教育学部・講師

研究者番号：8 0 3 4 7 6 5 8

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：